「平穏死」の意味

世田谷区立社会福祉事業団　特別養護老人ホーム
芦花（ろか）ホーム常勤医師　石飛幸三

「平穏死」というのは自然な人生の終焉の実態であり、それを知って改めてそこでの医療の意味を考えるための標語です。

自然な最期は本来穏やかなのです。それなのに現代の我々は自然に逆らって、高々人間が考える科学で、医学で、自然の仕組みを変えようとしているのです。そして平穏な最終章を混乱させているのです。

死なせてはいけない、医療で命を伸ばせるのならしなければならない、何もしないことは見殺しにすることだと思っているのです。

そうでしょうか。もう水分も栄養も受け付けないのに、無理に点滴で、水分栄養を入れて水浸しにし、胃瘻という方法があるから、命を伸ばせるからといって本人に苦しい思いをさせているのです。

医療は人のためになってこそ医療です。我々は、この本来の医療の意味を取り違えていないでしょうか。

がんを体に取り付いた怪物だと考え、体から切り離すしかないと思いました。メタボの時代になり動脈硬化との闘いも始めました。しかしがんも動脈硬化も長く生きて来た結果です。老衰の一形です。老衰には様々な病態があり、治せないものが増えます。それは治す意味がないのです。受け入れるべきものなのです。

最期には体はもう生きることを終えようとします。食べたくなくなります。無理に食べさせようとすると誤嚥します。肺炎を起こします。本人は苦しむので放っておけません。救急車を呼んで病院に送ります。肺炎を治しても食べられないことに変わりはありません。このままでは死んでしまう。胃瘻をつけます。本人は胃瘻をつけられて、ただ口だけ開けて、魂を抜かれて手足が拘縮してきます。これは一体誰の人生なのでしょう。誰がこんな最期を望んだでしょう。これは進歩でしょうか。こんな文化が人類史上にあったでしょうか。

法は国民のためにあります。命を伸ばす方法、医療というものがあるのに、それをしないことは不作為の殺人だと言って、まるでどこまでも医療が我々を生かしてくれるのだと錯覚していた節があります。医療の意味を考えなければならない時代

が来たのです。

古くから、人間はいずれ来る死を自然の摂理として受け入れて来ました。しかし今物質文明が進み、体を修繕する技術が進歩し、長生きできるようになると、もっと生きたい、もっと生かせたい、親と離れたくないと命を伸ばすことに固執し、保険証さえあればどこでも誰でも医療を受けられる、何もしないことは見捨てることになる、意味があろうとなかろうと医療をしておけば自分は責められない、自己保身、無責任な依存体質、不老不死、人間の欲望、これでは退歩です。

我々は親から命を受け継いで子にそれを繋いでいく生き物です。しかし我々は単なる生き物ではなく、最期の迎え方を通して生き方を学ぶ人間です。どう生きてどう終えるか、その内容がその時代の文化を示します。

私は特別養護老人ホームで自然な最期を送る人々を看取って、ああこの人もそうだった、この人もそうだったと思って次々と学ばせていただいています。一回しかない我々の人生です。生きている今が大切なのです。しっかり生きて、ああこれでよかったと思って最期を迎えたいものです。

平成２９年１月３０日